

日風堂周

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉

第39号 2001年3月1日

縄文時代の漆工芸について

慶應義塾大学名誉教授
松阪大学名誉教授

江坂 輝彌

従来、漆工芸技術は四、五世紀、古墳時代以降に朝鮮半島から渡来したものと考えられ、一九三〇年代後半まで日本古代史の著名学者である喜田貞吉博士などは、縄文文化終末期の東北地方北端部の青森県亀ヶ岡、是川両泥炭層遺跡出土の色鮮やかな朱漆塗の土器や籃胎漆器の製作年代は平安時代まで下降するのではないかと考えられ、東北北部にこの時代に居住した蝦夷がこのようなものを残したのではないかと考え、蝦夷はこの時代まで金属器を知らず、利器としては石器を使用していたものと想定された。

しかし、一九四八年一二月、千葉県南部、安房郡丸山町加茂に所在の縄文文化前期末の諸磯式土器の低湿地遺跡を発掘中、諸磯式の深鉢、浅鉢に黒色又は茶褐色の漆質の光沢ある資料の塗布された土器が出土した。

当時この資料を分析にあたった田辺義一氏は、土器面に塗布された僅かな塗料からは漆の成分を検出できなかったが、この土器を肉眼的に観察された漆芸家の是沢恭三氏は、この色と光沢は本漆の樹脂でなければ出せぬものであると語られた。

その後山形県南部の高島町おんだし遺跡、福井県東南部三方町鳥浜貝塚など

前期後半の遺跡から続々と漆塗り土器、木製品、櫛などが発掘され、縄文時代前期末、約五〇〇〇年前に既に漆芸技術が縄文文化中に浸透していたことを物語っている。朱漆塗碗型木製品、樹皮粉末と漆を練り合わせて作った一種の乾漆製の櫛頭部などもこの時期に本州北部の青森市三内遺跡などからも出土している。

最近、青森県八戸市是川、中居泥炭層遺跡で縄文時代晩期前半、今から約三〇〇〇年前後以前と思われる大洞B C式土器出土の文化層から、直径三〇センチ前後と思われる入組文様の彫刻された大型朱漆塗の木鉢が発掘され、そのわきから、木製の歯部も保存され、頭部は乾漆の完存する縦櫛も出土している。中居遺跡ではかつて一九三〇年代に正方形をした浅い箆に朱漆に塗った籃胎漆器、棍棒状朱漆木製品なども発掘されている。

以上紹介の遺跡の多くは東日本のものであるが、西日本でも九州佐賀県菜畑遺跡で縄文文化終末期の広口壺型土器に朱漆彩文土器が出土している。

高知県土佐市高岡町乙居徳遺跡発見のような口径約四四センチ、器高一二センチという大形の木製容器蓋かと思われる赤色漆塗木製品の出土は初めての

ことである。

この赤色塗料が朱であるか、鉄丹であるかは化学分析すれば容易にわかることであるが、大洞C 2式の文様ある朱彩文土器片の写真をみると光沢からして、水銀朱のように観取される。この木製品の赤も水銀朱であろうか。

またこの朱彩文様は東日本の大洞C 2式の土器に見られる文様とは異なる三叉文的な文様で大洞B、BC式の注口土器の胴部の文様に類似している。

現地説明会で平成一〇年一〇月一七日配布された資料によれば、「3 木胎漆器の位置づけ(1)、木胎漆器が蓋であるとすれば、亀ヶ岡文化の土器をはじめ、容器には蓋はほとんど認められませんが、中国長江流域の楚(春秋・戦国時代)には漆器・青銅器・陶器に多く見られます。」と紹介されている。

この蓋の文様に類似の注口土器は関東地方では後期末、加曾利B 3式の注口土器にあらわれ、東北地方でも十腰内3、大洞B、BC式の注口土器にあり、この時期の注口土器は蓋付のものが、かなり認められる。

中国長江南部の浙江省、福建省の山地は本漆の樹木の原生林のあるところで、約七〇〇〇年前からこの樹脂を採集し、漆製品を製作している。漆を土器、木質面にうまく延ばして塗布するために、樹脂、赤色塗料、又は黒色塗料をよく混ぜ合わせ、さらに荏胡摩の実から搾り取った荏の油を混ぜた溶液を塗ると伸びもよく、容易に塗れるという。

中国の浙江省余姚市河姆渡遺跡では

第四文化層（約七〇〇年前）から朱漆塗木製椀と荏胡摩の種子も発見されている。

河姆渡遺跡の第四文化層からはジャポニカ種の稲籾、栽培種の粳に混じってジャポニカ種の野生稲の稲籾も発見されている。また断面円形の環状の玦状耳飾（軟玉製）も出土、また日本の柴犬の祖先かと思われる中型犬の頭蓋骨、瓢箪の果皮、種子なども発掘されている。

河姆渡遺跡第四文化層と近似遺跡は上海市青浦崧沢遺跡下層、江蘇省蘇州市東北郊、吳県草鞋山遺跡下層などから稲籾とともに、漆塗木製品の破片、荏胡摩の種子、玦状耳飾などの発見があり、日本列島でも縄文文化早期末乃至前期初頭の遺跡から断面円形部厚な玦状耳飾、赤色漆塗製品、荏胡摩、瓢箪などが発見され、長江下流域付近から東支那海を渡って、これらの製作技術が西九州地方に伝播したものと考えられる。

稲も日本列島西九州地方には縄文文化前期末乃至中期初頭に西九州地方に伝播したのではないかと、毛昭晰博士は考えられている。

縄文文化晩期中葉の居徳遺跡で荏胡摩が栽培され、朱漆塗大型木製蓋が出土しても、今日の研究では疑う余地のない文化階程に達している。この時代に中国、江南の文化が南国高知でどれだけ摂取されているかが今後の研究課題ではなからうか。

（えさかてるや）

開館10周年関連企画展 「居徳遺跡」によせて

（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 曾我 貴行

いったい誰がいいはじめたのか、「IT革命」という言葉がいま大流行である。「IT」とは「情報技術」という意味らしいが、私にとつての「IT」とは、「居徳」の「居」と「徳」の頭文字からつた居徳遺跡の略号である。一九九六年に居徳遺跡周辺の試掘調査を担当した時から、私の中では「IT＝居徳遺跡」であった。

その「IT」が、一九九七・一九九八年の本格的な発掘調査を経て、全国規模の注目を集めるような「木胎漆器」「最古の鋏」「最大級の土偶」などの重要考古資料を相次いで現代の世に蘇らせた、そんな県内屈指の遺跡名に受け継がれようとは、私自身、まさか夢にも思わなかった。

その必然は、西暦二〇〇一年の今になつてやっと理解できた。「IT＝居徳遺跡」はこの高知県の歴史上における、新たなページをいくつも開いて見せてくれた。このことは、この高知県の歴史の延長線上に生きている我々高知県民にとつて、まさに革命的なことに値しよう。そう、高知県の「IT革命」

はずで一九九六年から始まっていたということなのだ。

本展は、この居徳遺跡の成果を県民の方々をはじめ多くの方々に知っていただくとうと意図したものである。居徳遺跡の整理作業は継続中であるが、その最新の成果に触れていただければ幸いである。

土佐市 居徳遺跡について

居徳遺跡（群）は、土佐市高岡町乙居徳ほかにある。土佐市の市街地の北方、四国霊場三五番札所・清滝寺の麓にあたる。四国横断自動車道の建設に際し

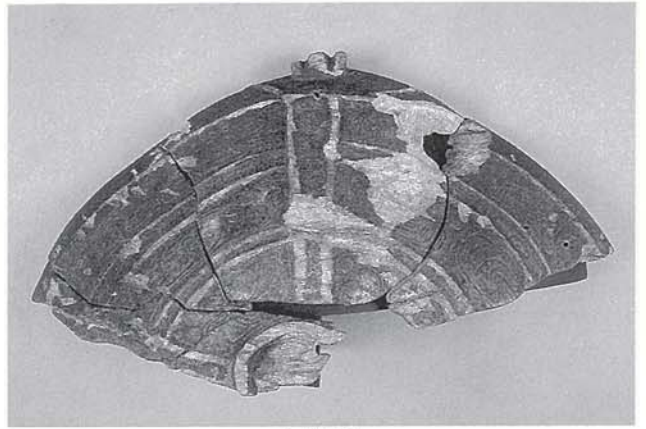


て発見され、その範囲は東西約四〇〇m、南北約七〇〇mにわたる。縄文時代後期～中世の複合遺跡で、集落跡、祭祀跡、旧河道などの性格を持つ。

居徳遺跡は、仁淀川西岸の沖積平野に見え隠れする三か所の低丘陵と、その間の谷部にある。集落域の中心はこれらの低丘陵上にあつたとみられるが、削平されていて存在しない。遺跡の中心は、集落域に接する斜面部分とその下方の低地域にある。そこには集落に接する廃棄帯、旧河道などが形成されており、集落から排出された貴重な品々が眠っていた。現代に生きる我々にとつては、さながら「宝の山」であつた。

木胎漆器

縄文時代晩期中葉～後葉初頭の旧河道から出土した。クスノキ製で約半分を欠くが、復元すれば隅丸方形とみられ、口径は約四四cmである。容器か蓋かは判別しがたく、その用途を超えた象徴的・祭祀的な存在であつた可能性も考えられる。外面全体に朱塗で複雑

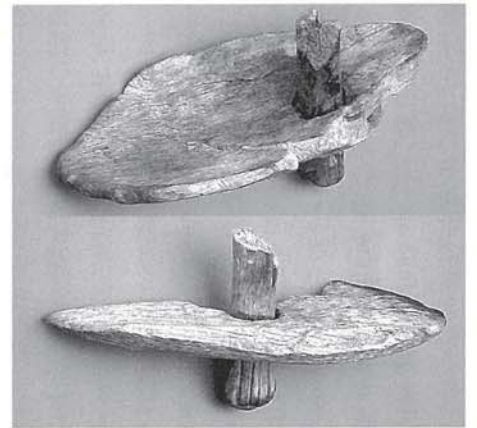


木胎漆器

かつ精巧な文様が繊細な筆致で描かれている。国内外に類例が認められず、その文様構成には、春秋・戦国時代の中国長江下流域の文化の影響を受けた可能性が高いと考えられるが、東北地方の亀ヶ岡文化の要素に近いものも見受けられ、国産品か渡来品か、見解の分かれるところとなっている。

木鍬

木胎漆器と同じ旧河道跡から二点が出土した。紡錘形という独特な形状、及び木取りについても弥生時代の鍬とは異なることが判明している。縄文時代晩期の鍬の出土は数例が知られるが、本例は縄文時代晩期中葉まで遡る



木鍬

ものであり、現時点では全国最古の木鍬である。

大型土偶

集落域に接する縄文時代晩期後半の廃棄帯から出土した。出土したのは頭部と胴の一部で、胴部以下と裏面の大半を欠く。残長は一八・二cmで、これから推定される全長は四〇〜四五cmと考えられる。これは全国最大といわれる北海道・著保内野遺跡出土土偶(四一・



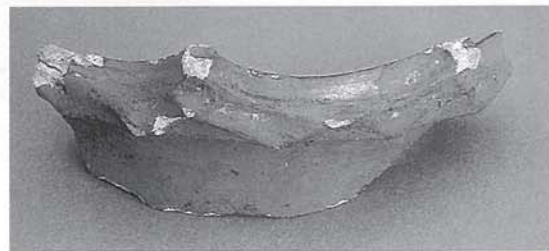
土偶

五cm)に匹敵する大きさである。

大洞式土器

集落域に接する縄文時代晩期〜弥生

時代前期の斜面堆積層から破片点数で三〇点余り(およそ二〜三個体分)が出土した。その殆どには朱塗・黒塗による塗彩が施されている。中でも



大洞式土器

朱彩された王冠状の口縁部片はひときわ鮮やかである。主に東北地方に分布する大洞式土器が遠く離れた四国の太平洋沿岸で出土することは、誰にも予測できなかった事態であり、その背景にある人的な交流やそのルートの存在など、高知と東北を結ぶ新たな歴史観を提供することとなった。

以上四つの居徳遺跡の代名詞とも言える資料のほかに、大洞式土器と同じ斜面堆積層から出土した縄文時代晩期〜弥生時代前期の出土資料を御覧いただく。この資料によって、居徳遺跡における弥生時代の始まりは、突帯文土

器と弥生土器とがセットになる、中村市・入田遺跡のような状況を呈していたことが判明した。仁淀川を挟んで、高知平野の西郊にある居徳遺跡だが、南国市・田村遺跡群とは異なる弥生時代の幕開けだったのである。また突帯文土器、大洞式土器、弥生土器が複雑に影響しあった、中性的な土器が存在することも注目される。

居徳遺跡は「交流」というキーワードで特徴づけられると私は考えている。大洞式土器の搬入をはじめ、木胎漆器や木鍬を保有するには対外交渉を欠くことはできなかっただろうし、大型土偶の存在にも東日本の影響を否定できない。しかも、突帯文土器や大洞式土器が互いに影響しあった土器を生成する背景には、外来要素に対するきわめて鷹揚な姿勢が感じられる。もし仮に、居徳遺跡が県内ではきわめて異質な集団の遺跡ではなく、地域に普遍性を有する遺跡だとするならば、高知県の歴史に受け継がれてきた「進取」という気風は、縄文時代の土佐人に熟成されたものだったのかもしれない。

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 主任調査員)

土佐の民具 4

いろいろな機能をもつ箕

坂本 正夫

「箕」は穀物を選別するために使用する農具です。以前の農家の納屋には箕が必ず収納されていましたが、平安中期の『倭名類聚抄』に箕の記録がありますので、その起源は古代にまでさかのぼります。

テープ状にした細い割竹を平らに綾編みにし、一方は開いたままにしておいて、残りの三方を折り曲げて、竹や木の縁をつけツツラや針金で固く縛るとできあがりますが、三日で五枚の箕を



橋原町茶屋谷で見た箕 (1971年)

製作するのが一人前の職人の仕事量だとされています。先端の弾力が使い勝手を左右するので、この部分に竹皮や桜の皮などを編み込むこともありました。

箕の大きさはいろいろですが、米作中心の地域のものに比べて、雑穀中心の山村の箕は若干大きくなっています。箕の製作には専門的な技術が必要なので特定の村の職人たちが製作し、彼らが廻村して販売したり（あるいは現地で作したり）、問屋を通じて荒物屋で販売したりしていました。

使用方法は箕の中に少量の穀物を入れ、その縁を両手で持ち、上下にゆり動かしておろし風によって皮や塵、埃などの軽い不純物をさび分け（より分け）ますが、そのさび方には技術がいります。

ところで、箕は農具としてだけでなく年中行事、さまざまな呪法や俗信、信仰儀礼などと結びついて用いられています。これは箕のくぼみが神霊の依り代と考えられていたからなのです。

正月祝いや収穫祭などには箕を正月神や田の神、山の神などをお迎える御座として、その中に供え物をしてお

祭りする所がありました。名月には、箕の中に置いた一升ますに芋を山盛りにして供えていた村もあります。このほか名つけ祝いや誕生祝いにも箕が登場します。

また土佐の葬送習俗には「箕先の塩」という呪法があります。庭先や縁側に塩を盛った小皿を中に入れた箕を置き、埋葬から帰った者が箕の先方から

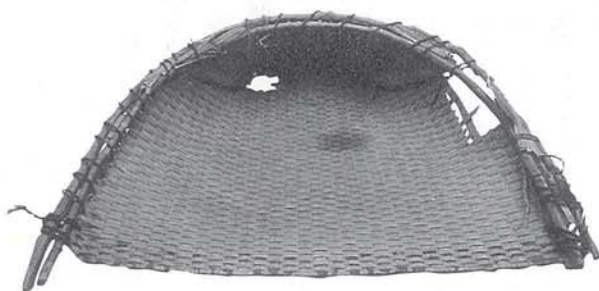


「箕先の塩」をなめて穢れを祓う (2000年2月 仁淀村沢渡)

柱を左廻りに廻りながら、一回ごとに塩をなめて三回廻って家の中へ入っています。

箕に関する呪法はこのほかにもいろいろなものがあります。たとえば戸外で急に悪寒がして原因不明の病気になったときは、玄関に患者を座らせ、その正面または背面から箕であおると治るといわれていました。

以上のように、箕には穀物と雑物をさび分けるという機能のほかに、信仰や俗信に関係するいろいろな機能があると考えられていました。このような各地の箕に関する資料をいちいちとりあげて、その解説をすると一冊の書物になるでしょう。



1905年製作の南国市久礼田の箕 (当館蔵)

四万十川の漁具(3)

イサリカナツキ

中村 淳子

河童のみっちゃんこと、岡村三男さんにイサリカナツキを使ったウナギ漁のことを聞いた。

イサリとは漁のことだが、岡村さんが住む中村市三里^{みさと}では、漁をすることを「イサリをする」というそうだ。古い言葉が残っているものである。

岡村さんは当館で「四万十川 漁の民俗誌」展を開催したときにお世話になった方のひとりで、集団で行なう勇壮な寒鯉漁の話と同展図録に収録している。河童のみっちゃんというのは川に潜ることが得意なところからきた愛称で、川の中の様子や鯉を素手で抱き取る話などいきいきとした語りには私は魅了されている。

さて、イサリカナツキは、ユニークな漁具である。どこがユニークかというと、漁そのものに使われるだけでなく、船の推進具としても使われるのである。イサリカナツキには長い竿がついており、船の棹の替わりにこの竿をさして船を進めるのである。

夜、船の舳の上に立ってイサリカナツキの竿で船を進めながら、ランプの明かりをたよりに1mくらいの深さの

ところを見ていく。ウナギが見えたらイサリカナツキで押さえる。棹を置いてカナツキに持ち替える必要が無く、なるほど合理的にできている。

ここで肝心なのは、突かずに押さえることである。はじめから勢いよく突くと、カナツキはちびるか、曲がってしまふからだ。押さえられたウナギは体かねじりまわるので、ひとりでイサリカナツキの刃先が体に刺さっていくことになる。そこを突き込むのだという。

ウナギの鮮度を落とさないように、



イサリカナツキ (全長2m50cm、刃先巾4cm)

イサリカナツキで押さえるのはウナギの首のあたりだけで、体の他の部分は傷つけないようにすることも大切であるという。

また、イサリカナツキの特徴としては、カエシが無いことがあげられる。突いたウナギは、船へ上げて船のサンへ引っかけておいて引つ張ると抜ける。カエシがなければそのときに抜け易いのである。捕れたウナギは魚籠へ入れずに船底へ落とし込んで溜めた。船底がいつぱいになるほどウナギが捕れたこともあったそう。

カナツキ漁ではカナツキの形が漁獲を左右する。例えば、均等に力が入るように、肩の部分が丸まったカナツキでなければ大きいものを仕留めることはできないのだという。イサリカナツキの場合、カナツキの幅が広ければ石に当たってウナギを逃がすおそれがあるから、幅を狭めてウラ(刃先)を絞っている。

イサリカナツキの竿には、ニガタケという竹を使う。これはオナゴダケともいい、川端で取ってくるが、二年竹くらいが堅くなくて割れにくくて良いという。何年竹かは色でわかるのだそう。自然を観察する岡村さんの確かなまなざしは、川の外でもかわらない。曲がった竹は焼いて真っ直ぐにするが、当地ではこれをユルメルという。

これに使う道具には竿の太さによって大中小があり、適当なものを使い分けられている。

イサリカナツキ漁の期間はだいたい三月下旬頃から七月頃までで、漁場はトロ(流れが静かで深いところ)の川原側である。トロから次のトロまでの間には必ず瀬がある。船にはイサリカナツキの他に、もうひとつ鯉ガナツキの小さいものを積んでおいて、瀬を下るときにはイサリカナツキから鯉ガナツキに持ち替える。

瀬でも船の舳に立ち、十〜十五mくらい先を見やっている。するとスズキが横切るのが見えたりする。それをねらって鯉ガナツキを投げると、弓なりに飛んでいって魚にブスツと刺さる。誰にでもできるものではなく、腕自慢の漁である。スズキの他にはナマズとか、チヌやボラなども捕れたという。

イサリカナツキと鯉ガナツキの漁は、トロで市場に持っていくウナギをとり、瀬では明日のおかずを突くといい塩梅であり、一晩の漁でも漁場や対象とする魚によって漁具を使い分けていることがわかる。

また、大きなスズキでも突いたら、明日の酒の肴になるだろう、みなにご馳走しよう——そういう楽しみもあったという。

※田の土の中で こんにゃく芋が育つ(2~6年)

こんにゃくつくり

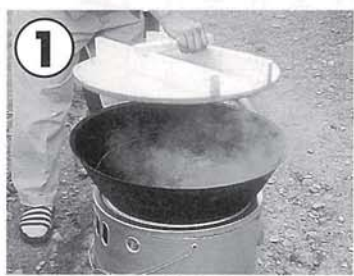


畑の中で育つこんにゃく

歴民レシピ

こんにゃくの作り方

昨年11月に、子ども歴史教室で「こんにゃく」を作りました。その時の秘伝(?)を大公開。
(指導=高橋キミ子・宮内幸恵/原資料作成=朝倉千代)



1 こんにゃくの生芋を、やわらかくなるまで煮る



2 芋の皮をはく



3 こまかく切る

切った芋と水をミキサーにかけてドロドロにする



水と芋の体積比は目算で水:芋=3:2



8 よく沸いた湯で、20~30分ゆがく



7 するとプリプリします。ちょうど固さになったら丸めます(手に水をつけながら玉の裏面をなめらかに仕上げます)



6 灰水を足しながらさらにこねる

灰水は、くど(カマド)やいろりの灰に湯を通してできた黒い水です



5 ドロドロになったものをこねる→少し固さがでてしまいます



いまだ美味しそうです

9

おいしかったよ

できあがり

ミキサーがなかった時代にはこんにゃく芋はデギノでついてつぶしていました



歴民は10周年を迎えます

歴民館が産声をあげたのが、今から一〇年前の一九九一年五月三日でした。高知県において初めての歴史系総合博物館の誕生でした。一〇年が経ち「歴民」と今では略称が定着してきた感もあります。開館以来延約三五万人のお客様が来館されました。

博物館の利用形態としては、展示見学が最もポピュラーかと思いますが、他にも講演会・子ども歴史教室(来年度からワクワクワークと改称予定)・史跡めぐりなど各種催し物への参加もあります。また、調査研究の目的で来館される方、電話による歴史関係の問い合わせなど一般にあまり知られていない利用もあります。団体利用では小学校の遠足や社会見学での利用、高齢者団体の利用なども春秋の気候の良い季節に集中しています。

博物館との新しい関わり方として、カルチャーサポーターという制度もできました。博物館のボランティアであり、館と利用者の架け橋になっていただく方々です。見る博物館から参加する博物館へという時代の流れの一つです。

高度経済成長の時代以降、世の中は

めまぐるしく変化してきました。特に歴民が開館してからの一〇年は情報通信分野を引き金として劇的な変化をした一〇年間であったと思います。

このめまぐるしく変化する時代にあつて、人々の心のよりどころとなるのは過去の人々の足跡ではないかと思ひます。歴民は過去にだけ目を向ける場ではなく、文化遺産を見て過去の人々の感性に触れ、豊かな未来を展望する糧となり、こうした時代の要請に応えて行ける場所となれたらと考えています。

歴民の設置に関する条例に「郷土の歴史・考古・民俗に関する資料等を調査研究し、収集し、保存し、及び展示して広く県民に紹介することにより、伝統をいかした個性豊かな県民文化の振興に寄与するため」という一文を職員一同あらためて肝に銘じて新世紀、博物館の役目を果たしていきたいと思ひます。

二〇〇一年度は開館一〇周年を記念して、さまざまなイベントを準備中です。これからも歴民をよろしくお願ひします。

▶ 歴民ホームページのご案内

一昨年一一月に歴民公式ホームページを立ち上げてからはや一年が過ぎました。昨年五月からのアクセス数は四千九百件を超えました。世間ではITの言葉が毎日のように飛び交っています。二〇〇〇年、ミレニアムの年は世紀末にふさわしくめまぐるしく変化する一年であつたようです。歴民のホームページは一度にとはいきませんが、だんだんと充実させていくよう努めております。その内容をかいつまんでご紹介いたしましょう。

「ご利用案内」では開館日開館時間、入館料、場所、バスの時刻表を掲載しています。「常設展示」は展示室の内容を写真とともに紹介、企画展のご案内も情報盛りだくさんで見逃せません。「行事案内」は、企画展をはじめ、講演会・子ども向けプログラムのことが紹介されています。

「通信販売」では館発行の出版物をはじめ、絵はがき、テレカなど歴民でしか買えないオリジナルグッズが紹介されています。「歴民サークル」では入会方法・会員特典なども紹介しています。これからも皆さまに役立つ情報を提供していきたいと考えています。ご意見やご提案などありましたら、お寄せください。実際のご来館とともに歴民HPへも「ご来館」ください。お待ちしております。

- ご利用案内
- 企画展のご案内
- 通信販売
- 小・中学校団体見学のしおり
- 民家(登録有形文化財・旧味元家住宅)
- 年報のご案内
- 資料利用の申請書様式
- 常設展示のご案内
- 平成12年度行事案内
- 歴民サークル
- 岡豊城跡
- 資料利用のご注意

平成13年3～6月の催し物

開館10周年関連企画展「居徳遺跡」 3月16日(金)～5月13日(日)

土佐市高岡町の居徳遺跡群は、総点数で50万点をこえるおびただしい量の遺物が出土し、また木製品など良好な状態で出土しました。出土遺物のなかでも国内に例のない木胎漆器・蓋(縄文時代晩期)、国内最古の木製鋏(縄文時代晩期)、県内初の土偶(縄文時代晩期)・東北地方の大洞式土器(縄文時代晩期)、県内最大規模の古墳時代祭祀跡(古墳時代前期～中期)などの注目すべき発見が相次ぎました。今回の展示では、縄文時代後期から弥生時代にわたる出土品を中心とし、数々の注目すべき発見にともなって出土した、土器・石器・木製品・動植物遺存体など、居徳遺跡群の多くの縄文～弥生時代の「語りべ」約300点を一堂に集め、公開します。

講演会 4/21(土) 14時～16時

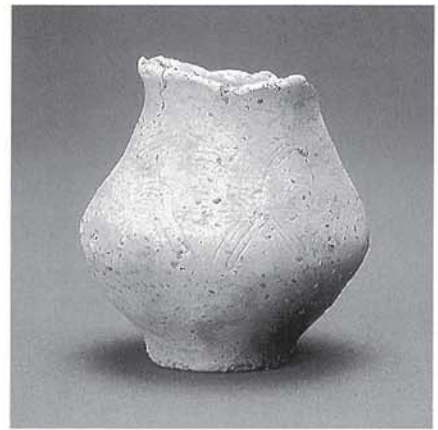
「縄文土器文化の中に見られる東南アジアの様相
-漆の採集・塗彩技術の起源と流れについて-」
慶應義塾大学名誉教授 江坂輝彌氏

講座 3/24(土) 14時～16時

展示解説 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
主任調査員 曾我 貴行氏
※講演会・講座ははがきで申込み、先着100名。

子ども歴史教室 14時スタート

3/10(土) 土佐民話の家⑥
※電話で申し込み、先着30名。



小型弥生土器

れきみんサークル
ただ今、新年度入会受付中

このサークルは、県立歴史民俗資料館をご活用いただくためのサークルです。館の企画展や史跡巡りなど、各種催しものの情報を提供します。

☆ 会員特典(サークル会員はこんなにお得)

☆ 会員証の提示により常設展および企画展(特別展)へご優待します。

☆ 年三～四回発行する「岡豊風日」(館広報誌)をご送付します。

☆ 館の行う企画展、講演会、史跡めぐりなどのご案内を送付します。

☆ 文化活動(句会、生け花等)が目的の場合、岡豊山歴史公園内の民家をご利用できます。

☆ 館編集の図録、紀要など全ての書籍を割引価格でご購入できます。

☆ カフェレスト野菜にてコーヒーマシンのサービスがあります。(お一人様一回限り)

☆ 一年間の館の活動記録「年報」をご送付します。

☆ 年会費年額一、二〇〇円(半年会員六〇〇円)受付で直接もしくは左記の口座へ郵便振替(〒住所・氏名・電話・年齢・生年月日・性別・勤務先を記入)でお申込みください。

016990-8-58321

高知県立歴史民俗資料館

れきみんサークル係

〒783-0004 南国市岡豊町八幡1099-1

TEL 0888(862) 2211

FAX 0888(862) 2110

岡豊風日(おこふうじ) 第39号

平成十三年三月一日

編集・発行 高知県立歴史民俗資料館

〒783-0004 南国市岡豊町八幡1099-1

TEL 0888(862) 2211

FAX 0888(862) 2110

開館時間 午前9時～午後5時

(入館は午後4時30分まで)

休館日 毎週月曜日(祝日及び振替休日)

あたる場合は翌日、12月28日

1月4日、臨時休館あり。

入館料 通常期(常設展)大人(18歳以上) 450円

団体(20人以上) 360円

高校生以下は無料

療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳所持者とその介護者(1名)、高知市及び高知県長寿手帳所持者は無料

印刷・共和印刷株式会社
http://www2.net-kochi.gr.jp/~kenbunka/rekimin/

《歴史館日録》

月日	出来事
1・13(土)	民俗講座②「民具と方言」
26(金)	運営協議会開催
27(土)	民俗講座③「岡ノ内の民具」
2・18(日)	企画展 「おばあちゃんの見た山村の80年」開幕

《ひとこと》

冬の岡豊山、閉けさのなかにも春の息吹を感じます。是非おいで下さい。(泉)
最近、健康のため昼休みにウォーキングをしています。城跡の遺構を横目に見ながらの散策、結構オツですよ。(野本)
子ども歴史教室でつくった出来たてのこんにゃくの味は格別でした。(曾我)